

氏名	下山博子		
学位の種類	博士(保健学)		
学位記番号	甲第73号		
学位授与の日付	2021年9月22日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
学位論文題目	Factors associated with nursing professionals' attitudes towards abortion care 中期中絶ケアに対する看護職者の態度に関連する要因		
論文審査員	主査	新潟医療福祉大学	教授 塚本康子
	副査	新潟医療福祉大学	教授 瀧口 徹
	副査	新潟医療福祉大学	教授 松井 由美子

論文内容の要旨

中期中絶ケアを行う看護職者には特有の職業性ストレスがあり、中絶ケアに対する看護職者の専門職としての役割意識には、職業性ストレスやバーンアウト、ワーク・エンゲイジメントに関連した要因が影響していると考えられる。本研究は、日本国内の中期中絶にかかわる看護職者の中期中絶ケアに対する態度とその関連要因について検討した。

日本国内の分娩取り扱い施設に勤務する看護職者を対象に「日本語版ユトレヒト・ワーク・エンゲイジメント尺度短縮版」、「専門職のQOL：共感満足と共感疲労尺度第5版」、「病院勤務の看護師を対象にした職業への満足度」を用いて、横断的調査を行った。266名から回答が得られ(回収率26.6%)、中期中絶の介助の経験がある236名(90.4%)を分析対象者とした。

中期中絶ケアに対する態度を目的変数とし、ワーク・エンゲイジメント、専門職のQOLの下位尺度、職務満足度およびその下位尺度と看護職者の特性を示す属性を説明変数としたロジスティック回帰分析では、職種、役職、経験年数、給料の満足度、共感性疲労/二次的トラウマ、年齢が予測因子として抽出された。中期中絶ケアに積極的な態度の看護職者の背景要因として、助産師であること(odds ratio; OR=2.884, 95%CI: 1.060-7.847, p=0.038)と看護管理職であること(OR=2.849, 95%CI: 1.084-7.487, p=0.034)、経験年数が長いこと(OR=1.147, 95%CI: 1.039-1.267, p=0.007)があげられた。また、年齢(OR=0.855, 95%CI: 0.779-0.938, p=0.001)、給料に満足していること(OR=1.049, 95%CI: 1.004-1.096, p=0.031)、専門職のQOLの「共感性疲労/二次的トラウマ」が低いこと(OR=0.911, 95%CI: 0.847-0.979, p=0.012)との関連性も強かつ

た。ケアに対する態度と各尺度、属性との比較においては、積極的態度の看護職者のワーク・エンゲイジメントは、消極的態度の看護職者よりも高く ($p=0.009$)、中期中絶ケアに対して満足感があり ($p=0.044$)、共感性疲労は低かった ($p=0.006$)。また「看護管理」の満足度と施設の中期中絶件数には関連があった ($p=0.001$)。

これらの結果から、中期中絶ケアにかかわる看護職者には、看護管理者による支援が重要で、仕事の満足度を高めることによって、看護師の燃え尽き症候群を防ぐ可能性が示唆された。中期中絶ケアにかかわる看護職者が、専門職としての役割を意識してケアするために、適切に設計されたトレーニングとサポートシステムの開発が必要であり、それらにより中絶ケアに対する積極的な態度を強化する可能性が示唆された。

キーワード：中期中絶ケア、看護職者の態度、ワーク・エンゲイジメント、専門職のQOL、職務満足度

論文審査結果の要旨

1. 本論文は、中期中絶ケアに対する看護職者のケアに対する態度と関連する要因について、ワーク・エンゲイジメントに着目して明らかにし、結果から看護職者への支援について示唆を得た研究である。

2. 本研究の独創性は、第一に看護職者が行う中期中絶ケアに着眼した点にある。わが国の人工妊娠中絶数は年間 15 万件で全妊娠数の 15% を占めており、中絶ケアは臨床では不可欠なケアとなっている。しかし、人工妊娠中絶に対する抵抗感から看護職者は中絶ケアに消極的になりやすく、教育を受けないまま経験知だけでケアに当たってきた。この中絶ケアに光を当てたことが第一の独創的な点といえる。さらに、これまで研究されてきた看護労働のバーンアウトや心理的ストレス反応というネガティブな概念ではなく、ワーク・エンゲイジメントというポジティブな概念に着目した点も独創的といえる。そのことによって、中期中絶ケアに積極的な態度の看護職者の特性が明らかにされている。わが国では人工妊娠中絶の手術は子宮内搔爬術が行われているが、WHO では安全性の面から吸引法を推奨している。2021 年 7 月、厚生労働省から産婦人科医に向けて「人工妊娠中絶など手術の安全性などについて(依頼)」が発信され、人工妊娠中絶手術は吸引法を推奨する、となった。これを受けて「安全な人工妊娠中絶」の検討が始まるものと思われ、看護職者として取り組む中絶ケアについても検討することが必須になると思われる。本研究は時宜をえた研究、ということができる。

本研究の方法は、自記式質問紙による要因探索研究である。全国の中期中絶にかかわ

る看護職者を対象として、「日本語版ユトレヒト・ワークエンゲイジメント尺度短縮版」「専門職の QOL：共感満足と共感疲労尺度」「病院勤務の看護師を対象にした職業への満足度」を用いた横断的調査を行った。回答が得られた中期中絶ケアを経験したことのある 236 名を対象として、差の検定、相関、一元配置分散分析、多重比較、ロジスティック回帰分析を用いて分析した。中期中絶ケアに積極的な態度の看護職者は、助産師である、看護管理職である、経験年数が高い、年齢が高い、給料に満足している、共感性疲労が低いことに関連が強いことが明らかとなった。また、中期中絶ケアに積極的な態度の看護職者は、消極的な態度の看護職者よりワーク・エンゲイジメントが高く、中期中絶ケアに対して満足感があり、共感性疲労は低いことも明らかとなった。さらに、看護職は中期中絶ケアを行う専門職であるという自覚は、ケアへの積極的な態度と関連しており、専門的なトレーニングを受けることで、中期中絶ケアを専門職としての仕事として自覚すること、共感性満足を高める可能性が示唆された。中期中絶ケアに積極的な態度の看護職者の特性は新たな知見である。

3. 本研究の評価できる点は、第一に、看護職者が消極的になりがちな中期中絶ケアを研究課題にした点である。研究者自身の助産師としての臨床経験から見出した研究課題であり、科学研究費補助金を受けた研究課題でもあり、今後の研究成果に大いに期待できる。第二に、本研究ではポジティブな概念であるワーク・エンゲイジメントに着目し、中期中絶ケアに積極的な態度である看護職者の特性を明らかにしたことがあげられる。研究者は成果を受けて、中期中絶ケアの教育プログラムという新たな課題に継続して取り組んでおり、有用な知見を見出すものと期待している。

4. 本論文の指摘事項

研究方法についての指摘として、対象者の選定方針があげられる。本研究では全国の分娩を取り扱う 500 施設に研究協力依頼をし、1 施設に 2 部ずつ合計 1000 部を配布し、266 名から回収した。助産師からの回答が多く、職種間の差について分析の精度を高めるためには対象者数を増やす必要があり、対象者の選定方針も検討する必要があるといえる。

5. 課題

看護職者への中絶ケアに特化した教育や専門的自律にむけた制度は未整備な状況であると研究者自身も指摘している。教育や制度を整備していくことは大きな課題といえるが、将来を見据えて前向きに検討していくことを期待している。現在、中期中絶ケアに関する教育プログラムの開発に取り組んでおり、さらに有用な知見を重ねてほしい。

以上のことから、審査委員会は本論文を博士論文に相応しいと認める。